

氏 名：小 楠 範 子

学 位 の 種 類：博士（看護学）

学 位 記 番 号：甲 第 2 5 号

学位授与年月日：平成 1 8 年 9 月 2 8 日

学位授与の要件：学位規則第 4 条第 1 項該当

論 文 題 目：施設における高齢者との対話記録検討を用いた終末ケアに関する実践研究

ACTION RESEARCH CONCERNING TERMINAL
CARE THROUGH THE EXAMINATION OF
CONVERSATIONS WITH ELDERLY RESIDENTS OF
A NURSING HOME

論文審査委員：主査 河 口 てる子

副査 武 井 麻 子

副査 守 田 美奈子

副査 川 嶋 みどり

副査 鶴 田 恵 子

論 文 内 容 の 要 旨

介護老人福祉施設(特養)の終末期ケアは、通常、家族の希望を把握することはあったとしても高齢者本人の希望は把握していない。高齢者の希望に添ったケアを展開するためには、終末期の意思を日頃から把握する必要があるが、どのようにすればいいのかわからないのが現状である。

【研究目的および方法】

本研究は、特養のスタッフが、高齢者の終末期の意思を把握するための具体的方法を見出すことを目的に、回想を中心とした高齢者の語りの記録を用いた検討会の中で、スタッフや高齢者がどのように変化していったのかを記述したアクションリサーチである。

特養ケアスタッフと共に、高齢者との対話記録を検討するとともに、看護師を対象とした勉強会を実施し、実践過程におけるケアスタッフや高齢者の変化を記述。一連のプロセスにより、特養の高齢者とケアスタッフにとっての対話記録検討の意味を考察し、特養における終末ケアの可能性を探る。研究参加者は、看護師と高齢者の看取りを行っている終末棟の介護士。対話記録の高齢者は 4 名。研究期間は、予備的フィールドワークを含め 1 年 5 ヶ月。

【研究プロセス】

予備的フィールドワークの結果、現場では高齢者が終末期をどのように過ごしたいのか、本人に聴く必要性を感じながらも方法が見出せない状況であった。そこで高齢者との対話記録をケアスタッフと共に検討していくことを提案し、2005 年 9 月から 7 ヶ月間、毎月 1 回、時間外の 1 時間半で対話記録の検討会を行い、このうちの 15 分間で、傾聴のポイントなどをテーマにしたミニ勉強会を行った。介護士（正職員）12 名/16 名と看護師 3 名/6 名が全 7 回の検討会の何れかに参

加した。また、検討会を円滑に進めるための補助的なプログラムとして、看護師対象の勉強会を提案し、2005年4月から1年間、毎月1〜2回、1時間実施した。

【結果】

1. 高齢者の終末期に関する意思把握としての「対話」の意義

高齢者の語りからは、「食べられなくなったら最後が近いとき。自然の流れに従うしかない」など、食べられなくなる時を最期が近いサインとして受け止めていた。「経管栄養をする、しない」などには答えられなくても、人生の回想の延長線上に「食」への思いを問うことで、高齢者なりの生の選択についての考えを聴くことができた。また、高齢者は死に場所よりも最期に共にいる“ひと”を選んでおり、高齢者にとっては肉体の死よりも「関係性」の途絶えが大きな気がかりであった。ある高齢者は、語るにより「息子が面会にこない寂しさを自分が我慢することで息子は息子の生活を営むことができる」と息子に役立っている自分という存在の意味づけを見出した。

対話は、ケアスタッフが援助者としての自分を確信できる場でもあった。高齢者の死でケアが終わる特養ではケアスタッフが無力感に陥ることもあるが、高齢者から名前でも呼んでもらえるようになった介護士は、援助者としての存在意義を確信させ、パワーを得ていた。対話という関係性の中で、回想を聴き、終末に関する問いを投げかけることは、高齢者に応じた終末期の意思把握の一方法であることが示唆された。

2. 対話記録の読み合わせ

高齢者との対話記録をケアスタッフと共に検討した検討会では、読みあわせを行った。日ごろ身近に高齢者と接しているケアスタッフによって、高齢者の語りはリアルに再現され、高齢者の語りに含まれる深い意味を理解することを助け、ケアの工夫を後押しした。対話記録の読み合わせは、ケアスタッフを動かす力を秘めており、対話記録の検討方法としての意義が示された。

3. 組織コミュニケーション

介護士5名と看護師1名が実際に対話に取り組み、対話記録を提示した。対話し、高齢者の笑顔に触れた彼らは、高齢者の望みは特別なことではなく、聴いてもらうことだと気づいた。同時に今までの関わりが、自分たちが欲しい情報を得るための「一方的」なもので、いかに高齢者の話を聴いていなかったかということにも気づいた。またケアスタッフ間の対話も一方通行であることの気づきがあった。

フィールドでは、全員参加の申し送りはなく、ケアスタッフは、「タイミングよく高齢者のことについて皆で話すチャンスがない」と、申し送りの簡略化でお互いの話し合いの場を失ってしまったことに気づいた。そこで申し送りの参加者を日勤介護士全員へと変更し、気になる高齢者について話し合うミニカンファレンスの時間を設けた。「朝から話題にのぼると、頭に残り方が違う」と語ったケアスタッフは、仕事でも高齢者に関する気づきを立ち話でお互いに伝え合い、ケアにつなげていた。ケアは新たな気づきを生み、メンバーに共有されてケアの工夫につながる循環が生じていた。

やがて、スタッフは、対話記録の検討会により、単に身体面だけでなく精神的ケアも検討でき、その人にあった具体的なケアにつながりやすいということに気づいていった。そして、この取り組みを施設全体に広めようと、新年度からケアプラン委員会を立ち上げることとなった。それは規定のケアプラン作成方法で十分に拾えない高齢者のニーズを対話記録の検討会を通して補い、

ケアに生かそうというものであった。このように、対話記録の検討会の取り組みは、積極的なケアスタッフによって施設全体に広がっていく可能性を示した。

論文審査の結果の要旨

専門委員会では、まず本論文の結果の内容および表現記述がよいこと、論旨が明確であること、問題解決への示唆が豊富なことなどが、高く評価された。

介護老人福祉施設(特養)の終末期ケアの現状に関しては、以前からいろいろと問題が多いことが指摘されているが、申請者は、回想を用いた高齢者の語りと、その語りである「対話記録」を材料にしたスタッフとの検討会にて、解決方法を示唆している。1 つは、高齢者の終末期の意思が、語りの中の日常的な「食」への思いや「最期に一緒にいたい人」にて把握できること、また語りが、高齢者自身の存在への意味を見出す可能性のあることである。2 つ目は、高齢者の語り「対話記録」を用いた検討会が、シナリオロールプレイの方法によって行われ、この検討方法が、ケアスタッフを動かす力を秘めていることが示唆されたことである。「対話記録」を用いた検討会は、申し送り方法を変え、ミニカンファレンスの時間を設け、そしてケアプラン委員会を立ち上げるまでになった。

このように(1)「回想を用いた高齢者の語り」から見出せた高齢者の終末期の意思内容が、新しい発見であること、また(2)対話記録の検討会で「シナリオロールプレイ」を用いるということが、実にユニークで、実施可能性といい、スタッフの気づきと行動化へのパワーの大きさからみて、本研究の意義が認められるところである。

特養は、一般社会では高齢者の介護の施設として認識されており、終末期のケアをする施設としては認識されていない。特養施設側も入所高齢者の家族も高齢者が重篤な病気になると病院への搬送を希望し、実際ほとんどの高齢者は病院で死を迎える。しかし、研究結果にもあるように、高齢者の望む終末期ケアは、決して病院での集中治療ではなく、人の温もりの中での静かな死である。本研究は、施設側と一般社会の認識を問題にすることを目的にはしていないが、結果的に、この点を鋭く指摘しているところにも、本研究の意義が認められる。

以上、本論文は、全体として高い完成度であることが認められたが、いくつかの点で指摘があり、修正を求められた。1 つは、「看護業務」という表現である。論文の序論で用いた看護業務の定義と考察等にて用いた看護業務の意味には、明らかな違いがあるのにもかかわらず、その言及もなく使っていることから、定義を明確にするように助言された。

さらに、考察の順番では、ユニークな検討会での方法である「シナリオロールプレイ」に関する記述は、より優先順位を上げて先に書くべきではないかとの指摘があった。表題は、特養高齢者ではなく、特養における高齢者と変更すること、英文抄録と論文表紙の英文タイトルに違いが見られるのを修正することなどの指摘があった。

以上のような質疑応答を行った結果、博士審査専門委員会は、加筆修正を必要とする部分はあるものの、本論文を全体として学位規則第4条に定める博士(看護学)の学位論文としてふさわしい水準にあると認め、「合格」と判定した。